保育における人形劇の活用
―その歴史と現状―

山　田　裕美子[1)]　　古　相　正　美[2)]

Applying Puppet Play in Early Childhood Education
― The Development and Current State ―

Yumiko Yamada [1)]　　Masami Furuso [2)]

（2015年11月27日受理）

Ⅰ．はじめに

現代の幼児保育は非常に多様化しているが、その中で子どもの心身をバランス良く発達させるために必要なものは何であるか、その本質を見失っている保育も少なくない。乳幼児期の遊びは全てにおいて学びであり、主体性をもって遊ぶことが重要である。そのために、保育者は子どもが自発的に遊びを展開できるような環境作りを心掛けなければならない。児童文化財も多様化している中で、人形を用いて遊ぶことは少なくなり、人形遊びはその存在感が薄れている。見立て遊びを通して、子どもは疑似体験をしたり模倣したりすることにより成長を重ねていく。また、幼児期に人形劇を鑑賞することは豊かな感性や想像力の発達を促し、演じることによって物語の世界を客観的に捉えたり、表現力や協調性等、様々な発達を促す効果があると考えられる。

そこで本研究では、保育における人形劇についての歴史やこれまでの研究をまとめ、人形を使った保育について、その必要性や活用の可能性について考えていきたい。

Ⅱ．人形劇の歴史

１．人形劇の発生

人形劇の歴史は古く、数千年前の人々が魔術的な力を信じていた時代に、信仰的な演芸行事が生まれ、やがて宗教的な神秘劇が発生し、そこで手足やその他の部分を動かせる人形が使われるようになったという。カリフォルニアの博物館には、インディアンの一種族の祖先を表現した糸で操る人形があり、このような儀式用の像が劇人形のもとであるとされている。また、エジプトでは紀元前16世紀の、糸で操られる象牙製の人形が発見されており、この人形は神話の登場人物であった。カイロの博物館には人形劇を表現している立像がある。人形劇は3600年以上も昔のエジプトに存在し、いろいろな種類の超自然的な力を人形によって示すような祭礼行事から生まれたと言える。やがてギリシャにおいて宗教的説話から文学的題材への転化がおこなわれ、紀元前５世紀から世俗人形劇が起こると、やがて世界各地で宗教的な人形劇から徐々に民間人形劇へと転化し、民間諷刺人形劇や騎士劇なども誕生した。17世紀の終わりには人形劇のための戯曲が作られ、『ファウスト』『ドン・ジュアン』などの優れた作品は現代の人形劇の古典となっている[1)]。

２．日本における人形劇の歴史

日本の人形劇の歴史について書かれた文献としては、『人形は生きている－日本人形芝居通史－』（中西敬二郎　古典芸術鑑賞会1955）を始め『人形劇の成立に関する研究』（角田一郎　旭屋書店1963）『日本の人形芝居』（永田衡吉　錦正社　1969）『日本操り人形史』（加納克己　八木書店2007）などがあり、それらをもとに人形劇の歴史をまとめていく。人形は紙や土による「ヒトカタ」から始まるのだろうが、それは人類の発生時からあり、呪術的なものだと思われる。その人形が動くものとなったのも古い時代らしく、８世紀の出土品の中に薄い木の板で手足が動かせる人形が発見されている。操り人形のかしら部分は奈良・平安～近世まで数多く見つかっており、操り人形は古くから日本に根付いたことがわかる。また、操り人形は「くくつ」と呼ばれたことが『新訳華厳経音義私記』（794年成）に「機関木人

別刷請求先：古相正美，中村学園大学教育学部，〒814-0198　福岡市城南区別府5-7-1
E-mail：furuso@nakamura-u.ac.jp
１）中村学園大学大学院学生　　２）中村学園大学教育学部教授

1)　エリザヴェータ・コーレンベルク著『人形劇の歴史』（大井数雄　訳）晩成書房　1990

久々都」とあることからわかり、11世紀末大江匡房『傀儡子記』が書かれ、「くぐつ」「くぐつまわし」「かいらいし」と呼ばれる集団が全国各地の交通の要所に屯し、操り人形や曲芸・奇術も演じたらしい。そして、中世末の牛若丸と浄瑠璃姫との恋物語『浄瑠璃物語』が語り物として流行し、これに三味線と操り人形が加わり、江戸初期に人形浄瑠璃が成立する。これは古浄瑠璃と呼ばれ、元禄時代を中心に竹本義太夫・近松門左衛門の黄金コンビにより流行する新浄瑠璃へと発展し、明治になって文楽と呼ばれるようになる。また、人形浄瑠璃は歌舞伎とともに、江戸・大坂・京などの都会だけでなく日本全国に広がり、多くの田舎芝居が演じられ、明治期にも数百の上演場所があったと言われている。

戦後、文楽を支える職業集団はわずかに200人足らずで、地方の人形芝居を続ける人々も20世紀後半、全国で三十数カ所しか確認されていない。その反面、新しく人形劇団が誕生し、東京の人形劇団プーク、神奈川の人形劇団ひとみ座、大阪の人形劇団クラルテはその代表で、今も子どもから大人まで楽しめる人形劇を作り続けている。しかし、現在では演劇や人形劇鑑賞の機会が少なくなり、人形劇を演じるだけではなくワークショップや講演会等幅広い活動をしながら劇団を維持していかなければならない現状があり、演者の高齢化も問題となっている。

テレビの人形劇も、「チロリン村とくるみの木」「ひょっこりひょうたん島」「新八犬伝」「三国志」などの人形劇が、昭和の頃は人気番組だったのだが、現在ではそうした番組も少なくなり、大学のサークルにおいても、人気サークルだった人形劇を中心とする児童文化部などの人気も低くなっているのが現状である。

３．保育における人形劇の歴史

人形劇を保育に取り入れたのは倉橋惣三（1882～1955）である。倉橋は幼少期から人形芝居に接する環境にあり、小学校時代には大道人形芝居をよく観ていた。その当時、倉橋が観た人形芝居は純歌舞伎式で子ども向きのものではなかった。東京尋常中学校時代には糸操り人形劇の『結城座』に心酔したが、これも歌舞伎ものであった。その後、東京帝国大学哲学科で心理学を専攻した倉橋は、さらに大学院に残って児童心理学を研究し、1917年11月、教授に昇格した後、東京女子高等師範学校附属幼稚園の主事を兼任する[2)]。1912年に結婚した倉橋は三児の父となり[3)]、純歌舞伎でないものを使って人形芝居を子ども向きに利用したいと考えていた。

1919年から２年間、倉橋は教育学及び心理学の在外研究員として欧米に派遣され、アメリカのマリオネットやイギリスのギニョールに出会い、帰国後1923年に東京女子高等師範学校附属幼稚園（現お茶の水女子大学付属幼稚園）において『お茶の水人形座』を創立し、留学先で出会った人形劇を参考に手袋式の指遣い人形『ギニョール』を導入した[4)]。この『お茶の水人形座』で子ども達に人形劇を観せたことが幼児教育への人形劇導入の始まりとされている。倉橋は何故子ども達に人形劇を見せるかについて、

> 私が子供のときに好きだつたからと申しませう。今の言葉でいふと私は子どもの時から人形芝居フアンだつたのです。それを思ひ返して見ると、可愛い私の子供にも見せてやりたい。次には幼稚園の子供にも見せてやりたくなるのです[5)]。

と述べている。しかし、倉橋は自身が子どもの頃に観た人形芝居を子どもに見せようとしたのではなく、子ども向けの内容で保育者にも演じやすいものに形を変えて保育に取り入れた。また、倉橋は人形芝居の長所として、

> 生きた人が芝居をするのはむつかしい。自分を現はすなら出來るが、脚本中の性格を出さうといふのはむつかしい。人形自身には性格がない。見てゐる子供が性格を創造して居ます。人形に魂を入れるのはむつかしいといひますが子供はぢきに入れます。此の他、脚本そのものが與へる教育效果は勿論の事ですが、人形の動きの大まかな、一體にのんきな味も人形芝居の大きな長所でしやう[6)]。

と述べている。時代は進化し続けているが、現在の保育における人形劇においても、子どもの人形劇を観劇する姿は当時と変わらず、子どもの創造する力を育み、観客を魅了する力は衰えていない。この談話の最後に倉橋が述べた、「テンポの早い現代に、子供の間だけでも暫く時代を超越させておきたいものじやありませんか[7)]。」という一言は、現在の保育現場に是非伝えたい言葉である。

また、内山憲尚（1899～1979）も人形劇の普及に貢

---

2)　金城久美子「倉橋惣三と人形劇－幼稚園教育へ導入の動機と目的に関する一考察－」『幼児教育史学会　幼児教育史研究』(4) 15-24頁　2009
3)　倉橋文雄「故倉橋惣三先生略歴」『幼兒の教育』第54巻６号10頁　日本幼稚園協會　1955
4)　金城久美子、前掲論文、24頁
5)　倉橋惣三「人形芝居の話－幼稚園談話會講演の大要筆記－」『幼兒の教育』第30巻６号19頁　日本幼稚園協會　1930
6)　倉橋惣三、前掲論文、23頁
7)　倉橋惣三、前掲論文、23頁

献した人物である。内山は小学校時代に祖父に連れられて浄瑠璃や文楽と出会う。小学５年生の時にはお伽話を聞き、そのことがのちに童話に興味を持つきっかけとなった。父が俳句を作っていたのに影響を受けて、彼も川柳を作り始める。1921年、浄土宗四音学園へボランティアとして泊まり込み、１年間不就学児童の夜学と子ども会の指導にあたる。ここで子どもの教育には教育者としての専門知識が必要であると感じ、1922年４月に東洋大学社会事業科に入学。同年５月に結成された日本童話協会の会員となる。1923年の関東大震災後、増上寺では罹災者を収容して救済しており、そこで増上寺託児所が開かれ、1924年より内山を主事として保育が開始された。翌年、明徳幼稚園に改められ、この頃より人形劇を園児たちに見せるようになった。内山は1930年に東京人形劇研究所を設立し、「子どもの人形座」を結成、人形劇の指導も行っている。1934年に始めた聖美幼稚園では幼児の想像力を養うことを目的に、子ども自身に人形を作らせ演じさせている[8]。

戦後、1948年に制定された『保育要領』には、保育内容として「ごっこ遊び、劇遊び、人形芝居」が取り入れられている。「人形芝居」については、以下のように掲載された。

人形劇は立体的であり、活動的であり、具体的であることによって幼児には特によろこばれる。

⑴　指使い人形芝居　指で使うもので、製作もきわめて簡単である。先生が作って見せてやるだけでなく、幼児たちに製作させて実演させることもおもしろい。

⑵　糸あやつり人形芝居　糸であやつるもので、人形の動作が自由である点から、幼児は興味を持つ。

⑶　影絵芝居　厚紙で人形の形を切り抜き、スクリーンに影を映す。昼間は太陽光線を利用して映すことができる。

⑷　その他　おもちゃを利用しての劇的な取り扱い、おもちゃの人形芝居・あきびん利用の人形芝居なども、ちょっと手をかてて指導すれば、おもしろいものができる。[9]

しかし、当時は保育者や子どもたちが生活の中で人形劇に触れる機会は非常に少なく、1956年の幼稚園教育要領では、言語の望ましい内容で「３．絵本・紙しばい・劇・幻燈・映画などを楽しむ」の中に「紙しばいや人形しばいをしたり、見たりする」「紙しばい・人形しばい・劇・幻燈・映画などを見たあとで、感じたことを発表する。」として、人形劇がその内容に含まれていたが[10]、1964年の改訂においては要領から人形芝居という言葉はなくなっている。

現在では幼稚園教育要領の中に人形の文字はなく、児童文化の教科書類の中に、児童文化財の一つとして人形遊びや人形劇遊びが紹介されている程度である。

Ⅲ．現在の保育における人形劇

現在の保育における人形劇は、年に一度程度プロの人形劇団を呼び観劇会を開催したり、保育者が子ども達に演じて見せることが多い。しかし、熊田の研究結果からも保育者が人形劇を演じることは人形を作る時間や練習時間の確保が困難であることがあきらかになっているように[11]、保育者が演じるのは人形劇ではなくペープサートやパネルシアターなどが使用されることが多いのが現状である。例えば、『ことばと表現力を育む児童文化』（川勝泰介・浅岡靖央・生駒幸子編著　萌文書林　2013）には「子どもたちは人形劇をはじめとしたシアタースタイルの児童文化財が大好きです。しかし、演じる側にとってみれば、本格的な人形劇はそうそう簡単にできるものではありません。操る人形や大道具を作るのも大変ですが、脚本を覚えて、練習して……。演目によっては数人で協力して演じなければなりませんから、本格的に行おうと思うと、日々の保育に忙しい現場ではなかなか実践することが難しそうです。」と書かれてあり、人形劇を保育者が演じるのは準備が大変なので、ペープサートやパネルシアター等を活用するよう勧めている。また、この本では人形劇は保育者が演じるシアタースタイルの児童文化財の一つとして紹介している。

しかし、保育の世界に人形劇を取り入れた倉橋や内山は子どもに人形劇を見せることだけではなく、演じることも保育の内容に取り入れようとしていた。広く人形遊びという視点から、『演習　児童文化　保育内容としての実践と展開』（小川清実編　萌文書林　2010）では、「保育者が人形劇の人形をつくって、それを使って保育者が人形劇を演じて、子どもたちがそれを見て、保育者が保育室に舞台を設定して、使った人形劇の人形（以後、パペットと呼ぶことにする）を設置し、子どもたち

[8]　斉藤尚子「保育における人形劇の史的検討Ⅱ－内山憲尚による人形劇団の創設と普及活動－」『東京家政大学研究紀要』第30集(1)　73-78頁　1990

[9]　文部省『保育要領－幼児教育の手引き　昭和二十二年度（試案）』1947

[10]　文部省『昭和三十一年公布幼稚園教育要領』1956

[11]　熊田武司「保育士における人形劇の実践について（Ⅱ）－岐阜市内の保育士を対象にした人形劇に対する意識調査から－」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第42集　69-79頁　2010

が上演作品をまねして再演してみる活動である。パペットにはさまざまな素材や形のものがある。」と書かれており、保育者が演じることを模倣する遊びとして紹介されているが、実際に内山は前述したように、幼児の想像力を養うことを目的に、子ども自身に人形を作らせ演じさせている。

このように現在の保育における人形劇の位置付けは曖昧であり、地域によってもその取り組みは様々であり、保育者が人形劇を取り入れるのは困難な状況である。保育現場では、年に一度程度の観劇会を開催する程度の園が一般的であるが、全国に目を向けてみると保育者や保護者、子どもが人形劇を演じる園が存在する。

埼玉県ふじみ野市にある「こどものその保育生活協同組合」では、毎年12月に年長組が人形劇を演じている。創立50年を迎えて認定子ども園となったこの園では、年に一度はプロの劇団による観劇会、年に三回は保護者人形劇サークルによる観劇会が行われており、更に毎月の誕生会では保育者が劇や人形劇を演じている。園には文庫があり、毎日物語の世界に触れる経験ができている。理事長の能登眞作氏は、子どもが人形劇を演じる際に、題材決めは必ず子ども達で一日かけて話しあいをさせていること、よく話し合いをし、話すことで見通しを立たせることに気を付けていると言い、子どもが自ら人と話す力を備え、何を言っても笑われない、何を言っても聞いてくれるという信頼関係を築いてから人形劇を主体的に創造することが重要であると述べていた[12)]。

環境として人形劇が身近に存在する例としては長野県飯田市を例に挙げる。飯田市の協力もあり地域全体に人形劇が浸透しており、年に一度開催される「いいだ人形劇フェスタ」では全国から人形劇人が集い、６日間で数多くの人形劇が演じられている。

この飯田市にある慈光幼稚園の園長である高松和子氏によると「保育に人形劇を意図的に取り入れることはなく、幼い頃から人形劇を観ている子ども達なので、自由遊びの中で自発的に人形劇遊びが発生する」といい、「幼い頃から人形劇に触れている子ども達は物事をイメージ化することが容易であり、動くものを作ることに対しての感覚が鋭い」という。

また、「人形劇に関わることは、思考としての言語発達に大きく関わっている」「劇遊びにおいての役割分担は子ども同士で決めることができ、台詞を作るなどして表現することを楽しむことができる」と述べられたことから[13)]、人形劇遊びや人形劇観劇には子どもの総合的な発達を促す効果があることが窺える。

また、飯田市内の小学校では授業の一環として人形劇活動が取り入れられており、松崎は人形劇の教育的意義について、

> 子どもは自己中心的であるからこそ、子どもが人形を手にし、その手にした人形を自分の外にあるものとして意識してそれを捉える経験は大きな意味を持ち、周囲のものや自分自身をも客観視する有力な最初のきっかけとなる。

と述べており、子どもが演じること・観ることの意味について

> 衝立で演じての身体が隠れるため、内向的な子どもや気の弱い子どもでも演じることができやすい。出遣いといって演じ手も観客の目に触れる中で人形を操作する手法もあるが、その場合も、人形という表現の主体者の存在は、演じ手にとっては大きな支えになり、舞台に立つ不安や緊張感を軽減させる。「人形劇ならばできるかもしれない」と、人形劇に取り組む子どもや大人でもこうした気持ちで人形劇にかかわる人も多い。そして、人形を用いて演じることは、自分とは違うもの・役になって、想像力を活発に働かせることに影響を与える。一般化された形象物としての人形が自分の外に存在することは、演じ手にとって、日常とのつながりや責任を全く感じずに、自由に性格づけをし自由に行動することができるのである[14)]。

として、人形劇を演じることは子どもだけでなく大人にとっても意義があることを述べている。

筆者が指導に携わった人形劇子ども講座では、参加した子ども達の中に幼い頃から絵本や人形劇に触れる機会が多い子どもがおり、年齢も小学生であることから、人形を手にすると自分で動きを工夫することができ、友達とも相談しながら演じることを楽しんでいた。

「人形劇子ども講座」の様子　2014.11.30

12)　筆者によるインタビュー　2015年３月11日実施
13)　筆者によるインタビュー　2015年８月５日実施
14)　松崎行代「学校教育における人形劇の教育的意義と課題－飯田市の学校における人形劇活動充実のために－」『飯田女子短期大学紀要』第25集　68頁　2008

このことからも、人形劇を演じる前に絵本などでお話の世界を存分に楽しむ経験や人形劇を観劇してお話の世界に引き込まれる体験を十分にしておく必要があると考える。

現在人形劇団はプロ、アマチュアを問わず全国に存在しており、幼稚園や保育園は容易に人形劇団を招いて子ども達に観劇の機会を与えることができるが、保育士が人形劇を演じることが可能であれば、より身近に人形劇を感じることができ、模倣活動も盛んに行われると推測する。

実際に慈光幼稚園では子ども達が演じた人形劇を保育士が演じたところ、大変喜び、その反応は人形劇団による観劇の時とは違う特別な反応を示したという[15)]。最も身近な存在である担任が演じる人形劇は安心感と親近感があり、自らが演じた人形を保育者が操ることは共有体験となり、子どもと保育者の間に一層の信頼関係を深める効果があると考えられる。

これらのことから、保育において人形劇を取り入れることは人間関係、表現、言語の領域等に関係し、子どもにとって総合的な発達を促す効果があるが、保育に取り入れるには保育環境を整えること、保育者が人形劇を身近なものとして捉えること、また保護者や地域に人形劇が浸透していることが望ましいことがあきらかとなる。

しかし、飯田市のように地域全体が人形劇に関わる地域は少なく、幼稚園や保育園において子ども達が人形劇を演じられるように環境を整えたり指導をすることができる保育者も少ない。熊田の研究結果のように、保育者に対し研修会を開いて人形を製作し、演じ方を学ぶことにより保育者は人形劇を実践することができるが[16)]、日々の保育に追われている保育者に果たして人形劇に取り組む意欲がどれだけあるのだろうか。

Ⅳ．今後の展望

これまで人形劇の歴史や保育における人形劇について考え、環境を整えることや経験の積み重ねが重要であることがあきらかとなった。つまり、実際に人形劇を保育に取り入れることは容易ではなく、意図的な保育や環境整備が必要となるのである。

今後は保育の中に環境として人形劇が身近にない幼稚園において、子ども達が人形遊びや人形劇鑑賞などを経験し、実際に人形に関わるとどのように変化していくのか、その表情や言動を観察し、これからの幼児にとって、また保育において人形遊びや人形劇がどのような役割を担うのかについて考えていきたい。

---

15)　筆者によるインタビュー　2015年８月５日実施

16)　熊田武司「保育教材としての人形劇の普及方法－岐阜市保育協会研修会の参加保育士を対象にした調査から－」『岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要』第45集　65-78頁　2013